

令和6年度
地域循環共生圏づくり支援体制構築事業
中間支援振り返りシート(2025.3)

活動団体の活動におけるテーマ

『いもいりリビングらぼが創出する
持続可能な地域コミュニティ』

活動団体の活動地域：長野県長野市芋井

活動団体名：芋井地区住民自治協議会

中間支援主体名：認定特定非営利活動法人

長野県NPOセンター

活動計画（概要）

地域循環共生圏の構築を通じてありたい地域の姿

多様な地区住民と地区外の関係人口が人材交流・協働することにより、持続可能な地域コミュニティを創出し、自然環境を再生・整備する。

地域に必要なプラットフォームの体制や仕組み

多様な視点で持続可能な地域を探る場として「いもいりビングらぼ」を2021年に設置している。

地域住民と地区外の専門的知識やスキルを持った企業やNPO、市内の大学に通う学生など若者も巻き込んで多様な発想やノウハウを積極的に取り入れたいと考えている。

ローカルSDGs事業として取り組む内容

1.草刈りバスターズ、芋井YOSAKU隊事業

2.シェアビレッジ、自然環境体験教育、探求的な学びのフィールド提供事業

3.災害に強いレジリエントな地域づくり、山林資源の活用事業



地域の現状

現在の住民自治協議会は、地区内の構成団体のみで編成されており、事業が内向的になりがち。役員は、70歳代後半の男性が中心で、女性の参加が少なく、若い世代の流出により担い手が不足している。また、地区内の公園等は整備が行き届かなくなり荒れて、訪れる人も少なくなっている。

2026年度末の状態目標

- ・ これまでの成果を積み上げて、新たな事業をスタートさせる。
- ・ 関係するステークホルダーと地域内の住民ならびに関係人口とが相互に関係を強めている。

2025年度末の状態目標

- ・ 新たな取組(シェアビレッジやPR活動)がスタートし、グループ活動として定着する。
- ・ 活動を通じて新たに関係するステークホルダーを発掘し、関係強化を図る。
- ・ 事業化をめざすテーマを定めて具体的に企画する。

2024年度末の状態目標

- ・ 「いもいりビングらぼ」の活動と、らぼから派生したグループ「草刈りバスターズ・芋井YOSAKU隊」の仲間を増やす。
- ・ 新たに仲間を増やす取り組み(シェアビレッジやPR活動)を具現化する。
- ・ 関係するステークホルダーとの関係強化を図る。

■見立て

「いもいりビングらぼ」を中心に、新たな参加者とステークホルダーを加えることで活動を活性化・発展せさる。
→広報を強化し、新たなステークホルダーを獲得する。

将来の共通目標となる地域ビジョンの作成と、ローカルSDGs事業の素案づくりを進める。
→過去のワークショップで把握された地域の課題と地域資源の整理をサポートする。

■打ち手

1.情報発信の支援

地域課題と地域資源の「見える化」
広報、取材と発信(動画・NEWS)
新たな参加者とステークホルダーの獲得

2.事務局の体制強化の支援

中核メンバーによる運営の安定化

3.事業化の支援

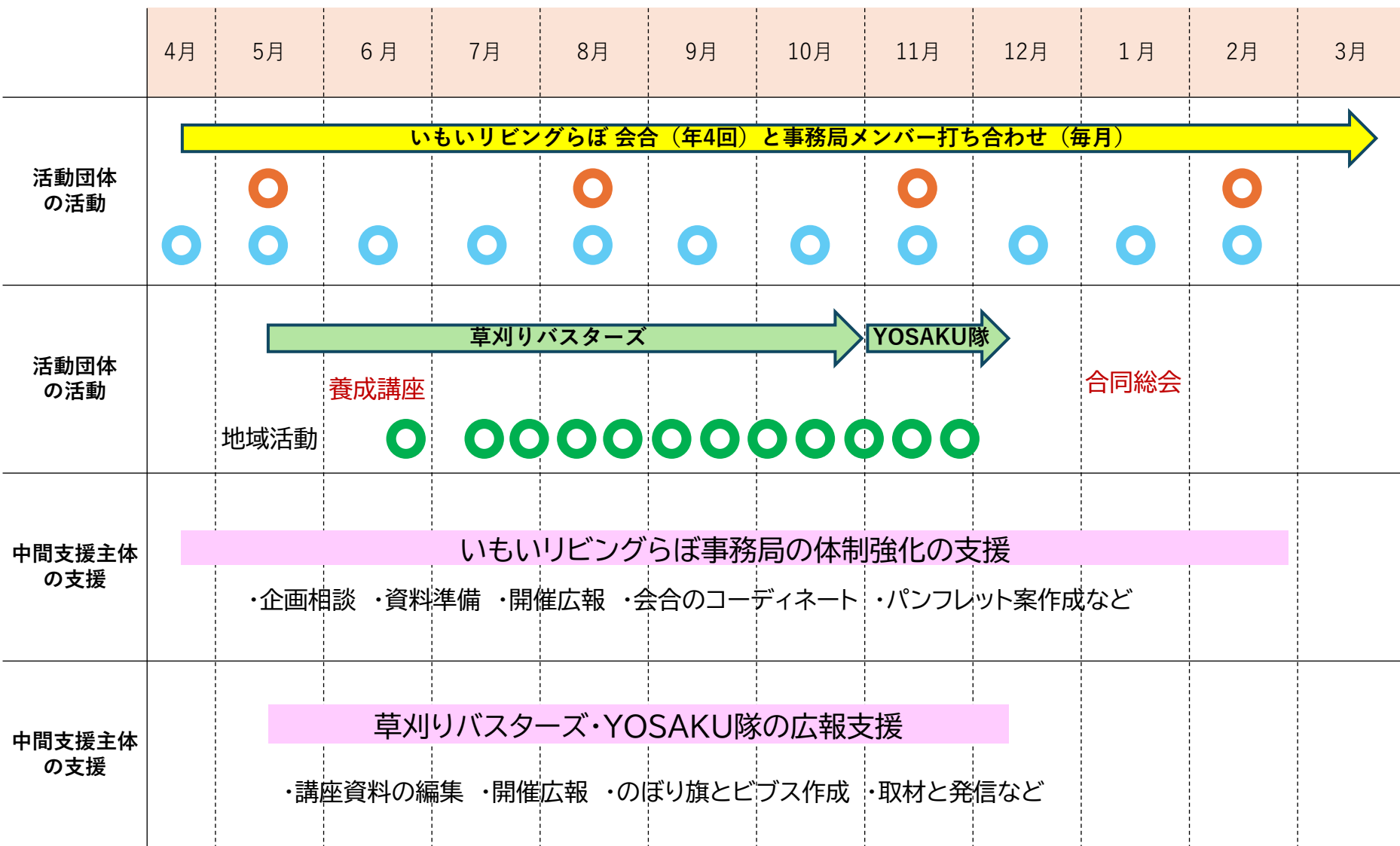
プログラムの企画と基礎固め
持続可能なツアー構築

■中間支援機能の強化・振り返り（初年度のため「展望」）

高齢化と担い手不足によって、地域環境の維持や活動が困難になっているといった中山間地に共通する課題を解決するひとつのモデルとして、長野県NPOセンターをはじめ県内の市民活動サポートセンターなどが参加する「中間支援組織ネットワーク」を活かして他地域へ普及させ、100年先も暮らしたい長野県を築きたい。

活動・支援のプロセスの振り返り

■R6年度活動・支援内容



活動・支援のプロセスの振り返り

■今年度、地域循環共生圏づくりのポイントとして注力したアクションサイクル①

いもいりビングらぼ事務局の体制強化の支援

中間支援主体の支援

- 上記アクションサイクルの取組を活動団体が進めるにあたっての見立て

活動を推進するエンジンの強化と、多様な人が関われる仕組みづくりが必要

- 具体的な支援内容（打ち手）

企画相談、関係資料の用意、開催案内のちらし作成と広報、会合のコーディネート、パンフレット案の作成

- 打ち手による活動団体の変化（意識・行動・活動の進捗）

アイデアや希望を出し合うワークショップを経て、想いを自由に出し合って将来のありたい姿を考えるようになった。

- 中間支援主体としての気づき・成長

会合の運営も多様な仕掛けと変化、刺激が必要。

活動団体の取組

- 活動名・時期

いもいりビングらぼ会合(年4回)

5月・8月・11月・2月

- なぜそれを実施したのか（実施目的）

めざす「持続可能な地域コミュニティ」を具体的に考え合い、多様な人々が関われる機会にするため。

- 実施したことによって共生圏づくりにどのような変化が起きたか（活動団体自身の変化・周囲の変化等の共生圏づくりに関わる進捗）

漠然と抱えていた想いを言語化して、第三者へ伝えることを意識するようになった。

活動・支援のプロセスの振り返り

■今年度、地域循環共生圏づくりのポイントとして注力したアクションサイクル②

草刈りバスターズ・YOSAKU隊の広報支援

中間支援主体の支援

- 上記アクションサイクルの取組を活動団体が進めるにあたっての見立て

せっかくの活動が地域内外にあまり知られていないので、しっかり「見せる」ことが必要。

- 具体的な支援内容（打ち手）

講座資料の編集（動画と印刷物）、開催案内の広報、のぼり旗とビブス作成、活動の取材と情報発信

- 打ち手による活動団体の変化（意識・行動・活動の進捗）

特に、のぼり旗は、地域内外に活動を見せる手段として有効に使われ、活動者自身の励みと誇りにもなった。

- 中間支援主体としての気づき・成長

活動団体の関係者が持っているぼんやりしたイメージを、言語化し見える化することで取り組みが進展していく。

活動団体の取組

- 活動名・時期

草刈りバスターズ

養成講座6月・地域実践活動7月～10月

楽天有志の体験会9月

EPO中部ブロックでの体験10月

芋井YOSAKU隊 11～12月

- なぜそれを実施したのか（実施目的）

人材の育成と地域の環境整備

- 実施したことによって共生圏づくりにどのような変化が起きたか（活動団体自身の変化・周囲の変化等の共生圏づくりに関わる進捗）

草刈りバスターズ養成講座と2回の体験会で、草刈り体験のニーズと事業化の可能性があることを知り、意識が前向きになった。

活動・支援のプロセスの振り返り

- （特に前2スライドの支援を実施するにあたり、）今年度、力を入れて取り組んだ中間支援は？（中間支援機能チェックリスト.xlsxより上位3つを選んで記入）

協働ガバナンスの項目	中間支援機能	項目（番号）	支援をしたタイミング等
チェンジエージェント機能	プロセス支援	(1)①	会合の周知、情報の発信
チェンジエージェント機能	プロセス支援	(2)③	情報の整理と資料作成
チェンジエージェント機能	プロセス支援	(3)①	ワークショップのファシリテーション

- 共生圏づくりを進めるために、活動団体の能力をどう引き出せたか

アイデアや希望を出し合うワークショップを経て、想いを自由に出し合って将来のありたい姿を考えるようになった。

また、漠然と抱えていた想いを言語化して、第三者へ伝え仲間を増やすことを意識するようになった。

- 中間支援主体として向上したと思う中間支援機能

漠然とした想いを最適な言語に表現するサポートと、対象者を意識した資料の作成

- R6課題だと感じたこと

将来のありたい姿に向けて動き出すためには、地域内の人材に無理と負担を強いるのではなく、地域外の人材と資源を巻き込むことをもっと考えたい。

地域循環共生圏づくりに向けた次のアクション

- 地域循環共生圏づくりのために、どのような中間支援機能を発揮できるか、と考えているか。R7～中間支援主体として今後どのようにになりたいか。

長野県の大半を占める中山間地での地域づくりに活かせる取組や工夫の集積と、地域住民を対象にした広報と対応方法、ステークホルダーの拡大に向けた対応方法などを蓄積していきたいと考えています。

- 活動団体がアクションサイクルを回せるようにするための次年度の見立て・打ち手（具体的な支援策）

いもいりビングらぼの事務局メンバーが名刺やのぼり旗を持って積極的に地域内外へ足を運んで、活動内容を広めて賛同者・協力者を増やすとともに、新たなステークホルダーを獲得し、ローカルSDGs事業化を具体的に進展させたいと考えています。

- 地方・全国事務局にサポートしてもらえると嬉しいこと

「草刈りバスターズ・ツアー」が実行可能になった段階での広報協力